

松:パーティーの雰囲気も稲垣つながりのお客さんがつくってくれて変化が
ついたね。

楠:稲垣はcollectiveのエース。

白:エースの登場と松井のライブでパーティーの音楽的質も大きく変わった。

松:ライブすることでcollectiveとの関わり方が変わった。我を出す部分が強
くなったかも。

真:(パーティー写真にあったTHE HUMAN LEAGUEのレコードを見て思
い出し)そうだ!私が初めてcollectiveでDJした時、楠田さんにレコードバッ
グの中身を見られて、凄く恥ずかしかったのを覚える。下着を見られるぐ
らい恥ずかしい思いがした。(笑)

楠:そう言われたのは僕も初めてで、新鮮やった。(笑)。YELLOW(スイスの
ニューウェイブユニット)のsolid pleasureというLPで、カエルの化け物がオシ
メしてるジャケ。「ヤベえ、真紀ちゃんこんなん持ってる!」って。もちろん俺
の愛聴盤。(笑)

楠:あとcollectiveと言えばpress collective(皆さんが今読んでいるこのフリー
ペーパー)の存在は特徴的ですね。

松、真:うん。圧倒的に。

楠:pressは松井が見せてくれたフリーペーパーが起源。テクノイベントが
作ってたフリペ。

松:そう。「ヨシ、これパクろう」て思った。でも、それはレコード紹介がメイン
で。

楠:僕はpressには音楽以外のことをメインに入れたいと思った。

涌:社交性が低いからpressの助けを借りようという。(笑)

楠:普段どんな連中なのか、メンバーのひととなりを知ってもらいたくて。

白:1回目から、お客さんの入場時に配ってたの?

松:そう。だから、1回目のpressには、パーティーへの思いを込めた。

楠:collectiveは音楽パーティーやから、pressにはやはり音楽の記事も入れ
た方が良いという白波瀬のアイデアが今のpressにはある。そのバランスが
良い。個人的には滝日記が6回で、そのあと新選組。そして赤線を記事にし
てきた。山からだんだん町に降りるイメージです。

涌:松井君のマカロンの記事もあったな。(笑)

白:ゲストにも書いてもらうというのは良い。記事を書くのは、はっきり言って
面倒臭いことやけど、「このパーティーでやるんや」という参加意識を持って
もらえるから凄く良い。

楠:pressを介して一つかたちができる。その意味ではご常連とゲスト、メン
バーが挙げたおすすめ「ディスクガイド」(2009年7月の18回目、5周年記
念企画)は素晴らしいかった。

白:真紀ちゃんもpressによく旅日記を書いてくれるけど、それも良いね。

真:pressを初めて見たときも衝撃的でした。書くことは勉強になります。

楠、白:ラブレターとか書かないの?

真:随分昔には書いたこともあったかな。(笑)

白:僕は編集担当やから自分が書くのは一番最後。皆が書いたのを見て、
何書こかになって思案してます。

楠:イベント本体は松井君で、pressは白波瀬君で成り立っていると言っ
ても過言ではない。

白:はっきり言って編集は面倒やけどねー。だけど、何もなくていきなりパー
ティー当日に集まって「ヨーイ、ドン」じゃなくて、pressを挟んでパー
ティーを迎えるのは良いよ。パーティーの2週間前、1週間前に、メンバー同士で
連絡取り合う良い機会としてさ。

楠:pressというプロセスを経て、collectiveを皆でやってるという意識付
けは確かに良い。

白:お客さんとのコミュニケーションツールだけど、僕らの対話を強めるも
のでもある。

皆:ウン。ウン。

白:基本的には「早よ記事出せよ」ってやりとりが多いんやけど。(ムフフ)

楠:で、この座談会の文字起こしの締め切りはいつなん?(ウフフ)ー締め
は5月11日になりましたー

information

今回は10周年記念としてゲストDJにOORUTAICHIをfeature。
collectiveとOORUTAICHIは意外な組み合わせと思われるかもし
れませんが、実は学生時代からのつながりがありまして・・・ 普段
はライブが中心のOORUTAICHI。今回はどんなDJになるのか楽し
みですね。

次回コレクティブは秋頃の開催を予定しています。10周年記念座
談会(後編)にも乞うご期待。

<http://blog-collective.blogspot.jp/>

collective 10周年記念座談会 前編

皆さんこんにちは。collective10周年パーティーにお越し下さり、誠に有難うございます。10年間のご支援にメンバー全員、感謝の気持ちで一杯です。今回は10周年記念として、4月29日に名古屋で開いた座談会(前編)をお届けします。collectiveのレジデントメンバーであるkengo matsui(松井健吾)、tawaki(白波瀬達也)、mackiart(渡辺真紀)、yu(稲垣優)、itaru wakui(涌井格)、楠田行展が出席し、過去のpress collectiveやフライヤー、パーティー写真、第1回～32回までの出演者リストに加え、各人パーティーへの思いを持ち寄りcollectiveの10年を回顧しました。今までの歩みを語り合うことでメンバー内の意識も再確認できたと感じています。10年で変わった部分、そして変わらない思いを感じていただければ幸いです。今後ともご愛顧の程、お願い致します。(以下kengo matsuiを松、tawakiを白、mackiartを真、yuを稲、itaru wakuiを涌、楠田行展を楠と略します)

楠: まずは松ちゃん。10年振り返っての感想からお願ひしたい。主宰という立場でこれまでの32回、全回参加しているんで。今日はそれ聞きたい。(田原総一郎のマネ)

松: 何の話しようかって思いながら新幹線乗ってきたんだけど、寝てしまっただけ。どうしょ…。

皆: (しよんぼり)

松: スタート時は、とりあえず3年は続けたいと思ってたけど、その先は全く考えてなかった。

白: もう10年やから「(周りも)やってるね」って感じやけど、最初は結構インパクトがあった。僕は初めはお客さんとして参加してたけど、パーティー形態が気に入って一緒にやりたいと思うようになった。

松: 大学を03年に卒業して。就職して友達同士集まる機会もないから、自分でやろうと思った。パーティーの時間帯や開催ペースは「自分もお客さん無理のないものを」というのが第一にあった。夜中はハコ代も高いし、昼間できる所を模索して。「週末午後」の形態では当時、東京のgalleryというパーティーがあった。collectiveが参照してるのはDavid MancusoのパーティーThe Loftの世界観。大音量ではなく、仲間と食べたり飲んだりしながら好きな音楽を楽しむというもので、その系譜に連なるものをしたかった。僕らの繋がりでもらひやすいのは音楽研究部(松井、白波瀬、稲垣、涌井、楠田が学生時代、所属していた文化部。音研と略)のメンバーで、音研外の友達にも来てもらひやすい状況を作ることが頭願ひにあった。昼間やれるクラブも探した結果、難波のハコか雲州堂に絞られて。最後に行ったのが雲州堂。企画書を持参して、反応が良かったのも雲州堂だった。

白: スタート当初のメンバー(松井、涌井、楠田)はパーティーづいてるメンバーではなかったし、最初はすべてがゼロベースだったんだね。

松: 涌井さん(松井の大学時代の先輩)との思い出で印象深いのは「この人は最強のハウスDJだから是非誘おう」とした時、自宅の電話しか知らなかったこと。涌井さん学生時代に携帯持ってなかったから。

涌: 当時、京都で一人暮らししてて。神戸の実家から電話が掛かってきて。「松井君って子から電話あったで〜」て。

松: ご両親が電話に出て、「格(いたる)さんいらっしゃいますか？」から始まって。

涌: 松井君って誰やったっけ？て思いながら連絡したのが、最初。

松: 自宅電話のハードルは高かった。(笑)

楠: 僕は女のコに告白する奴を横に付き添って励ますゾリでね。「頑張れよ」って。それでは松井君、2004年6月のcollective第1回の印象とか感想を話してもらえん？

松: テクノだ、ハウスだとガッツリ音楽が好きの人をメイン対象にしてなかったから、長時間居ても耳が痛くならない音量を心掛けた。椅子を多く準備したり。音楽はDJが皆、好きでやるんでほっというも頑張るから。それ以外の部分をどれだけやれるか凄く気にかけてよ。

楠: なるほどね。ところで、真紀ちゃんは何でcollectiveでやってくれるようになったの？

真: 稲垣君の誘いで遊びに来た時、衝撃を受けました。私はクラブでばかり遊んでいたんで先ず場所に感動した。雰囲気は凄く良くて。4カ月に1回のペースも丁度来やすかったし。

涌: 最初に入った瞬間からハートを鷲づかみに？(笑)

真: 入り口で、何ここ！？って。駅から「雲州堂どこだろ、どこだろ」って探した記憶がある。

楠: もともとの出会いは稲垣君だったと。

真: そう。mixiのLarry Heardコミュニティで。brankettというパーティでcollectiveの話聞いて。偶然collectiveのメンバーの出身大学が私と一緒に「何これ！？」ってなって。皆キャラクターが全然違うし、最初はメンバーとしてどう入っていったら良いんだろうと思ったけど、今は馴染んで楽にやってます。皆干渉せずにほっというってくれる感じが楽。(笑)

稲: (笑)。それは、真紀ちゃんへのケアが足りないんだと思いますけど。

松、楠、涌: (反省の面持ち)

松: 真紀ちゃんは2009年4月の17回目にゲストで来てくれて、その直後に白波瀬君が「メンバーに是非」と声を掛けてくれた。

白: 真紀ちゃんのDJは凄く良くて。男臭い他のメンバーにないグッドヴァイブスがあった。

楠: 男臭いうえに(楠田、涌井、松井の)初期メンバーは社交性が低い連中しかいないという致命的な欠陥があるからなー。その意味では、白波瀬君の加入も非常に大きいよ。

松: 白波瀬君がゲストに来てくれた時(2005年10月、6回目のcollective)に「このパーティーは実に素晴らしい」と褒めてくれたのは今でも覚えてる。

稲: 白波瀬さんはパーティーを運営するうえでの視点の立ち方が良いと思います。企画面で、特にゲスト選びのときにはバランスを取った意見を出してもらえますし。

白: (mackiart話に戻り)真紀ちゃんは本当にポジティブやからcollectiveに是非ほしいと。

松: collectiveに爽やかな風が駆け抜けた感じだった。

楠: collectiveにとって一服の清涼剤。

涌、白: Breezin'!! (G・ベンソンの名曲。collectiveクラシックスのひとつ)

白: 女の子のお客さんも来やすいだろうというのもあったしね。音研の間は大切やけど、内輪ノリが出過ぎるのは良くない。そのバランスは大事かと。

皆: (納得)

白: ところで稲垣君。僕は他に定期的にパーティーやってないから分かんないけど、パーティー前にはミーティングするのが一般的ななん？

稲: 割とパーティー前には皆で飲みに行きますね。どういう感じの音でやっっていくとか話しますよ。だからcollectiveはメンバーリストでの連絡だけでよく続くなど。(笑)

松: 皆の感じはある程度の予想付くし、それにめちやくちゃんにやってくれても良い。昔は場所とか昼間とかに馴染みややすい音を求めていたかもしれないけど、今はそういう拘りはないよ。

白: 多分それはメンバーが各自「この曲はcollectiveっぽいな」っていう感覚を持っているからかもしれない。なので、わざわざ合意をはかる必要も自然となくなった。僕はcollectiveでこの曲を掛けたいというのがある。collectiveクラシックスみたいなものがあるって、それをかける機会が4カ月に1回ある。

楠: 4カ月に1回のペースについてはどう？

松: 毎月フライヤー作って、声掛けてのサイクルは絶対まわせない。2カ月に1回でもキツいな。お客さんも「どうせ、また来月やるだろ」となると、来てくれなくなるだろうしね。

楠: 4カ月に1回は丁度良い。松井君が日程管理をちゃんとして、パーティー当日に、きちんと次回の日程を仮で決めるという。それが僕は無理だろうし、松井が主宰で良かった。

白: 僕が思うcollectiveの良さは、皆がそれぞれ違う役割を担ってて、それを互いに平等にしてこなかったこと。「俺こんだけやってんから、同じように今度はお前がやれよ」という感じじゃないのが凄く良い。でもこれはお互いのことを熟知してるからできるんだろうけど。

皆: (第1回～32回目までの日程や出演者を記したリストを見ながら)

涌: 真紀ちゃんがゲストやった2009年4月が松井君の初ライブなんや。

楠: じゃあ、そこはcollectiveにとって一つの転機になってるね。その3年前、2006年3月の7回目からは稲垣が参加してる。稲垣がお客さんの広がりをつくったのも大きな転機。